

司 式 杉 山 昌 樹 牧 師

前 奏

奏 楽 森 永 美 保 姉

開 会 招 詞 歴 代 誌 上 16 : 34 - 36

\* 賛 美 歌 14 : 1

1. ほめたたえよ、つくりぬしを、きよきみまえにひれふし、  
 ささげまつれ、身をも魂をも たぐいなき御名をあがめて。アーメン

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

\* 賛 美 歌 40 : 1

1. み栄えは主にあれ、めぐみの御神は 死の陰に坐したる み民をかえりみ、

み救いをもたらし みとのをきよむる かがやける使者を つかわしたまえり。アーメン

公 同 の 祈 禱 20 救 済 史 祈 禱 ① 命 の 契 約 ・ 原 福 音

天地のすべてのものを創造された、父・子・聖霊なる神さま、あなたは人間を神のかたち  
 に創造し、すべてよきものを与え、地にあるものを支配するように命じ、命の契約を結

んでくださいました。この祝福と光栄を心から感謝し、御名をあげます。しかし、わたしたち人間は、あなたの戒めに背いて墮落し、罪と死に支配される者となってしまいました。それにもかかわらず、あなたはわたしたちを愛し、探し求め、救い主がサタンのかしらを打ち砕くとの喜ばしい約束を与えてくださいました。この約束が、キリスト・イエスの日に実現したことを、心から感謝します。アーメン。(創世記1～3、黙示録22、ローマ16、「聖書」一)

献 金 (黒)・(赤) 大会開催日 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 イザヤ55：1-5(旧約 p.1152)

コロサイの信徒への手紙2章1-5節(新約 p.369)

説教・祈祷 「たとえ会ってなくても」 杉山昌樹牧師

\* 賛美歌 41：1, 2

1. 神はわがちから、わがたかきやぐら、くるしめるときの ちかきたすけなり。
2. みことばの水は つかれをいやして、新たなるいのち あたえてつきせじ。

アーメン

加入式(寺村市治郎兄・励子姉)

\* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ  
願わくは御名をあげさせたまえ  
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ  
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ  
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ  
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ  
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

\* 頌 栄 65

父、み子、みたまのおおみかみに、ときわにたえせずみさかえあれ。アーメン

\* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 古澤純一長老(司会・受付 次週：門脇献一長老)

本日 受付 1階：大日南信也・藤井牧子執事 2階：大日南隆夫執事 / ZOOMホスト・録音：番場駿也

次週 受付 1階：古澤迪子・加藤良明執事 2階：佐藤紀子執事 / ZOOMホスト・録音：門脇光生

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ2：1-5「たとえ会ってなくても」

状況としての不在

今日の説教題は「たとえ会ってなくても」としましたが、これは、まったく実際的な意味です。以前お話ししました通り、パウロはこの時すでに軟禁されていました。自由に歩けなないのです。今日の聖書ではコロサイの他に、ラオディキアという地名も登場しますし、直接顔を合わせたことの無い人々も登場しています。このような人たちとパウロは、一緒に働いていた人たちによって関わっていました。この手紙の後の方でエパfras、あるいはティキコ、オネシモといった人々が登場します。彼らが教会で奉仕をしていて、なおかつパウロとコロサイ及びその周辺の教会との間を行ったり来たりしているというのが実際のあり方だったようです。その意味では直接会っていないのです。

仲間意識

でも、そうであるからといって、パウロとコロサイの人たちの心の距離が遠いということではありません。5節では「霊ではあなた方と共にいて」とも書いてあります。思いにおいて、一緒に居るのだ、ということです。それで例えばですが、先週わたしは教師学科試験で試験管として三日間ずめのお宿で過ごしてきましたけれども、あの三日間というのは特別な体験で、試験官を務めた先生方や受験生の皆さんと、ある絆のようなものが生まれたと感じています。それは例えば、サマーデイズ、あるいは、青年修養会といったイベントに参加した高校生や青年同士が、何年かしても、あるいは何十年たっても友達であり続けている、ということにもよく表れています。そしてパウロは、このような仲間意識ということの中心にあるものを、しっかりととらえてほしいとこのところで願っているのです。それは、ただ人間として仲良くなる以上のことだと言いたいのです。はっきり言えばそこに神様が働いて腐っていることを知ってほしい、そのためにこそ自分は働いているということです。そのようなパウロの願いを語る言葉が1節に登場します。そこをもう一度読んでみます。

パウロの希望

「わたしが、あなたがたとラオディキアにいる人々のために、また、わたしとまだ直接顔を合わせたことのないすべての人のために、どれほど労苦して闘っているか、分かってほしい」。パウロは労苦して闘っている、と言います。それをわかってほしい、とも言います。しかしこれは、「いや、こう見えても僕はとても苦労しているんだ」、「それをわかってほしい」と言っているわけではありません。全く違います。おそらくパウロが、労苦しているのは、先ほどの「霊ではあなた方と共にいて」という言葉と関係しています。問題はこの霊の送り手が誰であるかです。離れているパウロに霊的な交わりを与えているのは言うまでもありませんが、イエス様です。キリストの霊がパウロと共にあります。キリストの霊がパウロと共に働いています。そして、パウロがコロサイの人たちのために、あるいはラオディキアの人たちのために、労苦して闘うというのは、より具体的には、このような教会の人たちの中にこのキリストの霊の働きがより豊かになるように言葉を伝え続けていく、という意味です。パウロは言葉によって、自らの中に働いてくださっているイエス様を、離れているコロサイの人たちと、ラオディキアの人たちと分かち合いたいということです。全くその意味で、例えば、イエス様はこのように教えてくれたんだ、あるいは、祈る時にはこうすればいいと教えてもらったんだ、ということから始まって、イエス様はこのような方なんだ、という信仰の核ができていってほしいし、そのために仲間と連絡を取り合い、教会の様子を知らせてもらい、せつせと手紙を書き、また仲間に伝言をたのんで、とにかく言葉を伝えてもらっている。ということ全般をパウロは労苦、あるいは闘いということです。

聞く人の中で

そうであれば、パウロの「分かってほしい」は苦労をわかってほしいのではなく、むしろ伝えている「言葉」そのものをわかってほしい、「言葉」を伝える業そのものがイエス様と一緒に活動していることになっている事実をわかってほしい、と言っていることになります。さらにこのところの2節は、そのような言葉の目指しているところを丁寧に解き明かす言葉になっています。ここでは三つのことが言われます。一つは、聞いている人が「励まし」を受けること、もう一つは「愛によって結び合わされる」

こと、そしてもう一つは「理解力を豊かに与えられてキリストを悟ること」です。そして、これはみんなばらばらのことではなく、一つの源から出ています。それは、3節にある通り、イエス様ご自身です。イエス様ご自身が秘密そのものであって、その秘密が開かれていくということが、言葉によって起こっていく、こういう流れです。いま、このようにして説教が語られ聞かれていますけれども、これもまた、全く同じことです。イエス様を中心にして、イエス様の秘密が、私たちの中で宝物のようにして、少しずつ開かれていく、この事が起きるために説教は語られているのです。ところで、先週は、東部中会の教師会がありました。教師会では、説教と、自由研究、そして大中全会の課題について、それぞれ担当する教師が発表をします。自由研究は今回は湘南恩寵教会の坂井孝宏先生が担当して下さい、田中剛二先生、と榊原康夫先生が、全く同じ聖書箇所であるコリント14：6-7からされた説教原稿を比較するという内容でした。

## 二人の説教

それ自体興味深く、また、いずれも名説教と呼ばれるにふさわしいものでした。お二人に共通するのは、かなり長い説教であるということです。田中先生が、一万字、榊原先生は一万三千字でした。私の普段説教がほぼ五千字弱ですから、倍の量あります。けれども、全く退屈なところがなく、安心して聖書解釈の深い理解に身をゆだねることができる説教です。そこで問題となっているのは、人間が得ている良いものは誰から来るのか、です。コリント教会では、どうも内部分裂があったようです。複数の教師がいて、私はだれだれ先生、いや、私はこちらの先生、というような状況であったようです。それに対して、パウロは、あなた方が持っているいいものはどこから来たのですか、私からですか、それともアポロからですか、そうではないでしょう、ということを書いて聞かせているのです。ということをお二人の先生は一万字をかけて丁寧に語ってくださっているのですが、とりあえず今わたしたちが心に留めたいのは、「いいものはどこから来るのか」という部分です。それはすでに、先ほど3節で確認した通りイエス様から来るのです。さらに言えば、この所では4節で、人間の知恵で語る言葉ではだめなのだ、そっちに行ってはいけない、聞くべき言葉は、イエス様の秘密の中に豊かに隠されている、ということがはっきりとされています。この人間の知恵の言葉についての問題はその後8節でも問題になりますからその所で丁寧に考えることにしまして、とりあえず今日は、残された時間で、この説教の言葉の響き、についていくつか確認をしたいのです。

## 説教で起きること

説教ということを考えます場合に、実は先ほどお話しした教師会の休み時間で話題になったことがあります。それは説教の根本理解に関する事柄です。私たちは、教会の憲法として、ウエストミンスター信仰規準を持っています。信仰告白の21章礼拝の中で説教について触れられていますが、むしろ、今確認したいのは1章の聖書論の中にある一つの言葉です。それは、端的に言いまして、わたしたちがみ言葉がわかるとはどういうことか、について記しています。その中に次のような言葉があります。「しかしそれにもかかわらず」聖書が素晴らしいことはただ読むだけでもわかるのだけれども、それにもかかわらず、というのです。「聖書の無謬の真理と神的権威に関する私たちの完全な納得と確信は」と続きます。理解にもより深い理解があると言いたいのです。聖書こそ誤りない真理だとわかる、これは確かに神様の言葉だと納得させられる、そのような理解は「み言葉と共に、私たちの心の中で証言して下さる聖霊の内的な御業から出るものである」とこれが結論です。ただ、聖書を読むだけでも、ただ、聖霊なる神さまが何となく語ってくださるのでもないのです。

## み言葉が開かれる

聖書が読まれ聞かれるところに、聖霊なる神さまが働いてくださるのです。そこで私たちはアツと思わされるような体験をするのです。詩編に有名な言葉があります。「御言葉が開かれると光が射出して／無知な者にも理解を与えます。」（119：130）。丁度光が射すようにして、聖書の言葉が、そこに隠された秘密が開かれていく、その意味が確かにされていく、その様子が語られています。そこでコロサイに戻りますけれども、先ほどの2章2節にパウロが願っていることの最初こととして「心を励まされ」

という言葉がありました。もちろん、この訳でもよいのですが、英語の聖書では、慰められ、と訳しているものがあります。さらには、勧告する、勧めの言葉を語る、という意味もあるようです。み言葉が語られるということは、それで終わらないで、このようにして、聖霊なる神さまのお働きとして、私たちの心に寄り添うようにして、慰めが与えられ、そのようにして柔らかくされた心に勧めのことは、こうしたらいいのではないか、という言葉が語り掛けられるというように、ちょっとこれは読み込みすぎかもしれませんが、そのようにして、私たちの心に新しい力が与えられるというのです。そして私たちの心が力を得ていくのなら、私たちのあり方も変わっていくのです。それが、愛によって結び合わされる、という言葉の意味です。コロサイではもう少し後3：14でこんな言葉があります。「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。」神様の働きかけがあるのなら、私たちは、愛を身に着けて互いに一つに結ばれていくようになるのです。今日、最初の所で、教会の行事で友情がはぐくまれる、ということをお話ししましたが、神様と一緒に活動するのならそのような愛が身についていくのです。

### キリストの中に秘められた計画

さらにここでは、キリストご自身が「神の秘められた計画」なのだ、ということを知ると続きます。ちょっと難しい言い方です。この「悟る」という言葉は、新しい協会共同訳では「深く知る」となっています。体験的に知るので、それは、キリストご自身を体験的に知っていく、という意味です。そこでさらに確認したいことがあります。それは、私たちは、イエス様を完全に知ることができるのか、という問いです。実は、これは不可能です。わたしたちが、イエス様を完全に知り尽くすことはできないのです。そうであるにもかかわらず、ここでは深く知ることができる、と言っているのです。完全に謎である方を、まさに謎である方として、私たちは、深く知っていく、味わい続けることができるということです。もっと単純化してしまいますと、私たちは、一生をかけて、イエス様という宝を探し続けるのです。一つみけても、二つ見つけても、まだまだ、イエス様という宝は、探しつくせないのです。すねをかじる、という言い方がありますが、その意味ではイエス様のすねは太いのです。この上もなく太くて、私たちはかじりつくせないのですけれども、イエス様は、かじっていいよ、是非かじってくれ、と言ってくれるのです。

### たとえ会っていなくても

それでパウロが言いたいことはこういうことです。実は私もこの宝探しをしているのだ。あなたたちと一緒にいるのだ、そして一緒に毎週宝を見つけ出している。それで、あなたたちがよいものを見つけ出して、教会が治まって、信仰がますます固くされているのを、離れていても一緒に味わっていて、それを喜んでいる、というのです。このようにして、キリスト者同士は、離れていても、また私たちのように教会として一緒に生活していても、秘められたイエス様を毎週知って喜んで歩むのです。

### 祈り

全能の父なる神様。あなたは私たちを主イエスにあってあなたの子としてくださったばかりでなく、主イエスという奥義に聞き続けるものとしてくださいましたから感謝します。わたしたちが、この愛磁歪尽くせない豊かさを、それでも週ごとに、また日々の生活においても、味わい、共に生きて、その豊かさを分け与えられて、教会の交わりを、また私たちそれぞれの歩みをいよいよ確かにしていくことができますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。